

CONTENTS

P1	国際バカロレア実施校として 国際基準の教育を目指して—
P2	立命館宇治 グローバル人材育成への挑戦
P4	立命館フェア in みやこめっせ
P8	2010年度 研修センター中間報告(上)

立命館一貫教育推進本部 News Letter

国際バカロレア実施校として 国際水準の教育を目指して—



立命館宇治中学校・高等学校 校長

汐崎 澄夫

Shiozaki Sumio



「これからの世代は国境のない人生をおくることになる」とファウスト学長（ハーバード大）が語っています。このような時代には、世界とつながるコミュニケーション力、国際通用力をもつ専門性、高い人格と教養を備えた人間性、情報化社会の中で自分の考えを伝える発信力がなければ活躍できません。覚えた知識の量ではなく、グローバルな視野で体得した知識や経験を世界が直面する様々な課題解決にどれだけ活用できるか、その力が試されるのです。

このような力はその必要性が語られたとしても、実態として「受験型学力」や「学校歴」重視の現実を変えるレベルには至っていません。そこに日本の教育の危機があります。

一方、世界を見渡せば中国やインド、韓国等では教育のグローバル化や科学・技術教育が急速に進んでいます。国際社会で存在感を高めている中国では既に45校がIB-DP（国際バ

カロレア・ディプロマプログラム）を導入しています。先日訪問したアブダビの高校でも科学・技術教育を充実させ、授業使用言語を英語とし世界各地の高校生や大学との交流を進めていました。アメリカの大学留学生数調査（IIE Open Doors2010）では日本が韓国の3分の1となり、世界6位にまで転落したことを伝えていますが、国際社会で有為な役割を發揮できる人材を育成するためには、中高段階から世界を意識した教育を進めていくことが不可欠であり、現にそれが世界中で進行しているのです。

本校が導入したIB-DP教育は、教科構成・授業内容・評価方法等はもちろん、TOKやCAS、EE等を含む教育活動全体に、国際社会で活躍できる必須の力と資質を育成する学習活動が系統的に配置されています。世界の文学作品を扱う課題やインタビューテスト、歴史事

象を経済的・政治的・文化的背景まで分析させ、それがどのような影響を与えたのかを問う論述試験、課外での社会貢献や創造活動を義務づける仕組み等、従来の日本の教育の経験を超えるワクワクした質の高い学びが生徒たちを主体的な学習者へと導いていきます。IBの教育目標である「より良い社会と平和な世界に寄与できる力」とは何か、その重要性を生徒たち自らがIB-DPの学びの中で認識し身につけていくようです。

このように真に国際通用力を備え世界の大学が高く評価しているIB-DP教育は、日本の教育全体の質を転換する突破口になるものです。また、日本国内のG-30や高等教育機関の国際化の基盤を拡大するためにも、IB-DP教育を拡大する環境を整備し10～20年後に活躍できるグローバル人材の育成をめざして社会全体で取り組むことが重要だと考えます。



立命館宇治グローバル人材育成への挑戦



国際バカロレア ディプロマプログラム(IBDP)とは

大学進学(もしくは中等教育を修了したとみなされる)資格は、その国ごとの教育制度によって決められています。インターナショナルスクールで国により異なる資格を指導することが負担となり、その結果、どの国でも通用する国際的な必要性が生じ、1968年に導入されたのが国際バカロレア (IB) 資格です。

国際バカロレア資格には、初等教育プログラム (PYP)、中等教育前期プログラム (MYP)、中等教育後期プログラム-ディプロマプログラム (DP) の3つのカテゴリがあり、立命館宇治高等学校はディプロマプログラムの実施校として、学校教育法第1条に定める学校で関西初の認定を受けました。

IBのめざす教育は、知的能力を重視する教

育であると同時に、「全人教育」として、国際的に通用する人材育成をめざすものです。

日本では、1979年に文部省(当時) 公示により「大学入学に関し高等学校を卒業したものと同等以上の学力があると認められる者の指定(文大大第177号:昭和54年4月25日)」として国内で通用する資格として認められています。

参考 6つの学習領域

カリキュラムは、TOK,CAS,EEの3つの領域と6つの科目グループで構成されています。各科目グループで多様な選択科目を準備していかなければなりません。現在、立命館宇治高等学校で提供している科目は以下の通りです。また、それぞれにHL (Higher Level) SL (Standard Level) を設けています。

世界水準の全人教育プログラム

3つの活動領域

TOK	知識の理論
CAS	創造性・活動・奉仕
EE	課題論文

6つの探究教科群

Group 1	第一言語 文学	Group 4	実験科学 生物・化学・物理など
Group 2	第二言語 言語と文学	Group 5	数学・情報科学
Group 3	個人と社会 (歴史・地理・経済・経営・心理学など)	Group 6	芸術 美術・音楽・演劇など



❖ **IB Learner Profile** —— 「より良い社会と平和な世界を築くために貢献できる若者を育成する」ことを目標として、次の10の「IBの学習者像」を掲げ、常に教育活動の中心に据えています。

- | | |
|--------------------------------------|----------------------------------|
| 01 Inquirers …………… (探究する人) | 06 Open-Minded…………… (心を開く人) |
| 02 Knowledgeable ……… (知識のある人) | 07 Caring ……………… (思いやりのある人) |
| 03 Thinkers ……………… (考える人) | 08 Risk-Takers ………… (挑戦する人) |
| 04 Communicators ……… (コミュニケーションできる人) | 09 Balanced…………… (バランスのとれた人) |
| 05 Principled ……………… (正義感のある人) | 10 Reflective ……………… (振り返りのできる人) |



本校IB-DPの概要

IB-DPは高校教育課程の最後の2年間、高校2年・3年の2年間でディプロマを取得することが要件です。世界的には9月入学・2年後の5月に統一テスト受験という生徒が大勢を占める中で、本校は4月に入学し11月に統一テストを受験するため、どうしても実施期間が短くなるをえません。必要な時間数を確保するのに一苦労ですが熱心な教員の指導と生徒の高い意欲で順調に進んでいます。

IB-DPでは6つの科目群*からHigher Levelの科目(240時間履修)を3科目以

上、Standard Levelの科目(150時間履修)を3科目履修しなければなりません。6つの科目群は高校生が広範な一般教養をバランスよく身につけるように配置されています。各教科の評価は7段階で行われ、世界中で行われる統一テストで合計24点以上を取得しなければディプロマを取得することはできません。また、IB-DP教育の特色としてTOK (Theory of Knowledge) , EE (Extended Essay) , CAS (Creativity, Action, Service) の課題があります。この3領域でそれぞれが学んだ知識を十

分活用し、実践的に深めていることが証明できなければ、科目の評価と点数がどれだけ高くてもディプロマは取得できません。また、最も重要でIB教育の核をなすものはIB Learner Profile* (学習者像)です。生徒に常に要求される10の特性は、inquirer, thinker, risk-taker等の表現でグローバル社会に生きる人間が身につけるべき資質を端的に表現しています。これらは「立命館憲章」の精神を教育に具現化したものと読むこともできるものです。IB教育の中心理念はこのLearner Profileに凝縮されています。



CASおよびPre-CAS

立命館宇治におけるIBDP履修生たちは、自ら様々な分野におけるCAS活動をCASの基本であるCreativity(創造性)、Action(活動)、Service(奉仕活動)に沿ったテーマで計画し、行っています。その中でも特筆すべきは、生徒たちが今年度海外の学生会議へ参加したこと、そしてそれらの報告会を行っ



たことです。生徒たちは夏期に行われた香港、中国、インドネシア、米国での学生会議に参加し、青年リーダーシップ、環境保全、平和、国際関連などのテーマについて深く考える機会を得ました。宇治に戻った後、それらの会議で得た知識、考え方、経験、インスピレーションなどを発表しました。これらの国際的な学生会議に参加することで、文化の壁や国境を越えたネットワークを作り、それらが生徒たちのこれからの大学生活や、将来に大きく貢献することは間違いないでしょう。

立命館宇治高等学校の1年生で、現在IB準備コースを履修している生徒たちは、立命館宇治高等学校で特別に作られたPre-CAS(CAS準備プログラム)を学んでいます。このプログ

ラムは、関西地域のフィールドワークとして、大阪で行われる演劇練習に参加したり、宇治市



の世界遺産である平等院や宇治上神社について探求したりするものです。今月、IB準備コースの生徒たちは、自らCAS活動を計画し、それらの準備に取りかかりました。今回の活動は全て、校内の環境向上に貢献するもの、というテーマのもと行われます。図書館の利用環境や学校内での安全向上などに目を向け、またそれと同時にIBに対する理解を中学生にも広げるといった目的で実施されます。



IB教育の発展のために

始まったばかりのIB-DPですが、日本の「受験教育」や「正解主義」にとらわれず新しい教育創造に挑戦できるのは立命館の一貫教育の下でこそ可能なことです。このIB教育は日本の教育を変える可能性を持っていると思います。

IB教育を発展させていくためには、まず、何よりも私たち立命館宇治高校が確実に成果を上げなければなりません。海外大学のアドミッションオフィスとの関係も広がっています。現在、1年生16人、2年生8人の限られた取り組みですが、IB教育を充実させ国際社会で活躍できる生徒を育てていきたいと思っています。

第2に、IB教育の成果や取り組みを全国に広げ、認知を高めていく必要があります。大学入学資格としてのIB-DPは世界中の大



学から非常に高い評価を受けています。ブリティッシュコロンビア大学は『世界大学ランキング2010』(クアクアレリシモンズ)では44位とされていますが、IB-DP取得者のスコアは24点から入学資格を認めています。高いスコアを要求する学部でも29点~30点あれば入学可能です。科目の評価によっては単位認定や奨学金の対象となる学部も多々あります。来年度以降、玉川学園や東京学芸大学附属高校でもIB-DPを実施する準備を進めています。国内の一条校も少しずつ増えていくかもしれません。また、日本のインターナショナルスクールへの評価や期待も変化すると思います。

第3に、IB-DPの資格を国内外のどの学校で取得しても日本国内の大学がそれを認めていくよう条件整備を進めなければなりません。世界では非常に高く評価されているIB-DPですが、日本の多くの大学では日本語能力がなければ入学できないのが実態です。また、IB-DP取得者であっても一条校であればセンター試験を義務付ける等、IB取得者や国際学生が学べる環境が整備されていません。その障害を取り除かなければなりません。

第4に、立命館学園全体でIB教育の優れた点を共有し、国内外のネットワークも含めて



総合的な活用を図ることです。IB校は欧米でもアジアでも急速に拡大しています。非英語圏で英語による教育をする学校や国際水準で質の高い科学・技術教育を進める学校も増えています。また、日本に赴任する研究者や企業関係者等が帯同する子供たちが現地と同じように教育を受けることができ、立命館の優れた教育資源を活用しながら学べる環境を準備していくことは、立命館大学やアジア太平洋大学の国際化基盤を拡大することにもなります。もちろん、附属校生徒の学びの質を高め国際化教育の推進にも貢献できるのではないのでしょうか。

本校は、2010年4月にスタートしたばかりですが、このIB-DPを軸に外国語教育や理数教育等での突出した成果をつくり出し、国際通用力のある新しい中等教育、アジア太平洋地域の国際教育拠点となる学校づくりに向かって挑戦を続けていきたいと思っています。

立命館フェア in みやこめっせ

学園創立110周年、APU開学10周年記念企画として、

2010年9月26日(日)に京都市勧業館を会場とし、「立命館フェアinみやこめっせ」を実施しました。

当日は約2,800人の参加者が会場に足を運び、児童・生徒の発表や成果作品を熱心に鑑賞する様子が見られました。

周年記念企画として実施した本企画は、立命館の教学を広く知ってもらおう目的とともに、初めて学園の附属校5校が一堂に会する企画として実施しました。同時に立命館附属校同士の横のつながりを作る機会としても各学校の児童・生徒、教職員が協力し合い、当日に向けて取り組んでいる様子が見られました。

会場には、ステージ企画ゾーン、入試相談ゾーン、芸術作品展示ゾーン、サイエンス教育ゾーン、国際教育ゾーン、大学紹介ゾーン、ポスターセッション・研究発表ゾーン、映像制作上映ゾーンを設け、それぞれのゾーンで児童や生徒が、附属校で日々取り組んでいる活動の発表をしたり、立命館の一貫教育が誇る世界水準の教学を紹介したりしました。



立命館中学校・高等学校

当日は、ステージ企画ゾーンで、立命館高等学校で取り組んだSCP(Student Company Program)を発表しました。



社長の中嶋奏真に
かわり、SCPで成長
したことについて話
させてもらおうと思
います。わたしは、株
式会社P・O・Pの経
理部長として経理部
をまとめ、会社の業
績を伸ばそうと尽力
しました。このプロ
グラムが始まったと
き、皆は別々の方向

向いていました。そ
れでも諦めず、社長
を中心に皆で話し合
いを続けるうちに、
一人、また一人とま
とまわっていき、最
最終的には大きな業
績を残せるまでの会
社へと成長したのだ
です。わたしはこの
プログラムで、皆がま
とまわることの大切



さを知りました。一
人一人は小さな力
でも、それが集ま
れば大きな力へと
変わることができる
のです。そして、こ
の経験で得られたこ
とを周りに向けて発
信していこうと思っ
た。



立命館高等学校
田邊 光樹

❖ SCP(Student Company Program)とは

生徒が学校の中に資本金1万円(100円/株×100株)で会社を立ち上げ、商品の開発・生産・販売を行ってその経営成果を16週間後の株主総会で発表する、ジュニア・アチーブメント本部が提供している実体験型の経済教育プログラムです。人的配置を決め会社を運営し、実際の会社の運営方式に準じて活動を行いますので、会社の仕組みや経

済の働きを学ぶことができます。立命館高等学校では、この活動を通じて、課題分析や問題解決能力・情報収集の意味・広い視野にもとづく自立的な判断力や意思決定力・結果に対する責任意識・他人と違う意見を述べる勇気、異質の意見に対する寛容性など実生活上で役立つ基本的資質の育成を目的としています。

立命館宇治中学校・高等学校

国際教育ゾーンで、立命館宇治高等学校で取り組んでいるIBDPの模擬授業に参加しました。

私が担当した国際教育ブースでは、2種類の活動を行いました。

1つ目は、IB教育の紹介です。ポスター展示に沿って、来場者を案内しましたが、ほとんどの人がIBに関心を持っていて、普段の授業



国際教育ゾーン

内容や今までの経験についてたくさんの質問を受けました。最初はきちんと受け答えできるのか心配でしたが、真剣に話を聞いてくださったので落ちついて話すことができました。

2つ目は、模擬授業での通訳です。当日の授業内容やアドリブに合わせたその場その場での通訳が必要でしたので、とても緊張し、不安でした。今まで何度も英語を日本語に変えることはしてきました。しかし、スピーチは、一回一回先生の言葉を覚え、授業の流れを止めること



なく素早く生徒(子供)に分かりやすい、内容に適した日本語に変換することが重要です。非常に難しいと思いました。緊張から日本語訳が変になってしまったことも何度かありました。それでも模擬授業の後、来場者のお一人が「いい通訳でした」と言ってくださり、とても達成感を感じました。

相手にわかりやすく伝える難しさをこの立命館フェアで学びました。



立命館宇治高等学校
佐崎 詩菜

立命館慶祥中学校・高等学校

ステージ企画ゾーンで、立命館慶祥中学校で取り組んだよさこいを発表しました。

立命館フェアで私が強く思ったのは同じチームの仲間の大切さと、立命館学園の一員としての認識を忘れてはいけないという事です。

立命館慶祥よさこいチームは七月に催された学校祭のダンスやよさこいで選ばれたメンバーで結成されたチームです。選抜されたメンバーというのもあって、皆振付の覚えが早く、時には間違いを指摘してくれ、一つ一つの練習の内容がとても濃く良いものでした。

今回は自分達で振付を考えなければならぬ踊りもあり、私ともう一人のリーダーで試行錯誤を繰り返しながら振付を考えました。“よさこい”は、



ジャズダンスやヒップホップ、ましてやバレエでも無い全く違うジャンルだったので最初はとても戸惑いました。

しかし、他のメンバーに意見を出してもらいなどして、最終的には自分たちが納得のいく良い踊り、良い振付ができたと思います。

リハーサル場で自分達と同じように懸命



に練習する立命館宇治、立命館守山の人達の姿を見ると自分達は立命館学園の一員だという事を改めて認識しました。

臨場感溢れる和太鼓、伝統的な衣装が印象的だった田楽。特

に、私は田楽というものを見たことも無かったし、どんな音楽で、どんな振付で踊るのかも知りませんでした。けれど、このような交流の場で初めての体験ができたことをとても嬉しく思っています。



立命館慶祥中学校
吉田 夏実

立命館守山中学校・高等学校

当日は、ステージ企画ゾーンで、立命館守山中学校で取り組んだ田楽を発表しました。

夏休み明けに始まった立命館フェアに向けての田楽の練習は、サウナのような体育館で数時間取り組み、まるで修行のようでした。



た。しかしこの頑張りが「みやこめっせ」会場で大きく花を咲かせました。ドンツコツコツコドンツコドン、太鼓の音が会場の静寂を打ち破ったかと思うと、一瞬の間に立守ワールドが広がり、みんなの心がひとつになりました。本番はとても緊張しましたが、胸を張って堂々と舞うことができました。そして「やる



ときはやる」そんなみんなの意気込みが伝わってきて、とても感動的でした。先生方や友達と一体になって本当に楽しかったです。これからもいろいろなことに挑戦して、すてきな立守生を目指したいです。



立命館守山中学校
小嶋 都

立命館小学校

サイエンス教育ゾーンのロボット実演ブースで、自分で作成したロボットを紹介しました。

僕は、ロボット部で活動していて、11月6日・7日に日本代表としてWRO世界大会に出場するというチャンスに恵まれました。こ



サイエンス教育ゾーン

の大会では、自分で作成したロボットを英語で紹介するというプレゼンテーション能力が求められます。立命館フェアでは、訪れた多くの人たちに対して自分たちで作ったロボットの紹介をしました。最初のうちは、恥ずかしくてなかなかうまく説明できませんでしたが、説明を繰り返すうちに堂々と説明できるようになりました。立命館フェアでの



経験により、世界大会でも多くの人たちに自分たちのロボットの技術をアピールすることができたと思います。



立命館小学校
水野 紘邦

祇園祭の長刀鉾をロボットで表現し、日本代表としてWRO (World Robot Olympiad) 世界大会(フィリピン・マニラ)に出場

芸術作品展ゾーン

作品を通して見える附属校生の感性教育

立命館小学校 横澤 茂夫

立命館フェア当日、会場には立命館小学校、立命館中学校・高等学校、立命館宇治中学校・高等学校、立命館慶祥中学校・高等学校、立命館守山中学校・高等学校（順不同）の児童・生徒たちの芸術作品が一堂に会した。大変圧巻な作品であった。

展示会場は会場中央に広く設けられ、それぞれの校種から絵画・版画・デザイン・造形・照明・陶芸・書道・写真などが展示された。

小学校児童作品では、色彩豊かな絵画や木工作品と伝統的な抹茶茶碗の取り組みなどが紹介された。

中学校になると各附属校の特徴がよくあらわれて、お気に入りの模写作品や風景画、自分の思いを表現した構想画・心象絵画、虫ビ

ンの集合で表された造形、版画、CDジャケットなどの平面デザインなど、多種多様な表現による作品が並んだ。身近なデザインなどは誰にでも親しみやすく、じっくり鑑賞している姿が見られた。

高校になると、一層表現力を増し、来場した小さな児童たちは大きな油彩の作品の前に立ってじっくり鑑賞していたのが印象的だった。また、木版画、明りの器、立体作品、陶芸などが出品され多くの方々が熱心に鑑賞していた。中でも書道・篆刻作品は、生徒たちの質の高い表現が光り、会場を華やかに彩っていた。

当日、会場には関係する児童・生徒・保護者等が予想以上に集まり、芸術作品鑑賞を楽しんでくれたことに、展示を担当した一員として感謝申し上げたい。

とくに、芸術作品は人々の内面の価値に基づく崇高なものであるだけに、それぞれの体験や期待を基に鑑賞できる良さがある。また、各校種の特徴、児童生徒の健全な発達とたくましい美的な感性が瞬間に理解できる良さもある。そのことによって、立命館学園の附属

校の芸術教育がどのように進められているかを理解するよい機会となったのではないかと思っている。また、学園としても、確かな知の教育と芸術を中心とする美的な感性の教育は、本学園教育の両輪であることが再確認されたものと信じる。そういうすべての意味を込めて、今回の芸術作品展はまことに有意義だったと総括できる。

最後に、このような作品展示は、主催者側の日頃の実践と大変な努力によって実現したものであり、全ての関係者に何とお礼を言ってよいかかわからないくらいお世話になった。失礼ではありますが、この紙面をお借りして心から感謝を申し上げます。有難うございました。



芸術作品展ゾーン



DVD作品制作企画特別講評

立命館フェアに伴い、高校生によるDVD作品制作企画において特別講評にご協力頂きました。フェア当日には、ステージ上で最優秀作品を発表頂き、立命館高等学校の生徒達の作品が選ばれました。

映像学部 准教授 藤岡 幹嗣



立命館フェア開催に伴って、附属高校の生徒達が制作したDVD作品の講評を担当致しました。どの学校の作品もそれぞれに特徴

がありました。立命館慶祥高等学校の作品では自然を意識し、自然の中で学んでいる様子を表現する工夫を感じました。立命館守山高等学校の作品では、紙飛行機を使った象徴表現が使用されており、映像の構築も、映っている対象も、非常にパワフルに感じました。

4校の生徒作品を見させて頂きましたが、中には高校生の作品とは思えない程、技術の高さを感じた作品もありました。

また、皆さんの作品の根幹となる感性や感覚は、「今」だけのもの

です。今回は映像での表現でしたが、更に映像表現を迫るもよし、新たな表現手段に挑戦するもよし。豊かな発想力を育みながら今後も頑張ってください。

これからの活躍を非常に楽しみにしています。

があり、楽しみながら見させて頂きました。

立命館高等学校の作品には、構成力の高さが感じられ、準備段階からしっかり案を練られていたように感じました。立命館宇治高等学校の作品では、学校生活の楽しさがリアルに伝わってくる作風で、映像技術の点でも勢いを感じ



映像制作上映ゾーン

ステージ企画ゾーン

Rits Robot Competition

立命館小学校 副校長 荒木 貴之



附属校児童生徒が一堂に集い、小学校から大学・大学院までの一貫教育の良さを体感できる参加型のイベントとして、立命館コミュニケーションマーク「R」をステージとした、ロボットパフォーマンス大会「Rits Robot Competition」を企画実施しました。

立命館とロボットとの関係はとても深く、理工学部ロボティクス学科は、ロボットとロボティクスの教育と研究を担う学科として1996年に世界で初めて設立されました。当日基調講演をお願いした高橋智隆さんは、立命館高等学校・立命館大学のOBであり、世界的なロボットクリエイターとして、国内外から注目されています。そして、立命館小学校では、確かな学力形成を図る一環として、「ものづくりを重視したサイエンス学習」を目指

し、国内の諸学校には類を見ない「ロボティクス科」を通年で開設しています。また、立命館高等学校と立命館守山高等学校は文部科学省スーパーサイエンスハイスクールに指定されており、生徒たちは国内外のロボット大会への参加や学会・研究会での研究発表等に取り組んでいます。

当日は、附属校5校から選抜された児童生徒が参加し、1分30秒の時間の中で、「R」マークのステージを走破するとともに、途中にロボットパフォーマンスを盛り込むという内容で実施をしました。立ち見もできるほどの会場の中で、参加した全チームは素晴らしいプレゼンテーション及びロボットパフォーマンスを行い、国内トップレベルの教育の一端を広く社会の皆様にご覧いただくことができました。ご覧いただいた高橋智隆さん、理工学部ロボティクス学科教授であり日本ロボット学会副会長である川村貞夫先生からは、それぞれのチームの試技が終わるたびに、高い評価をいただきました。

すべての附属校の児童生徒が集い、同一の課題解決に取り組むのは初めての



ことでしたが、参加した児童生徒はもちろん、ご覧いただいた皆様も、立命館の教育力の高さを実感されたことでしょうか。学校のキャンパスはそれぞれ離れていますが、それぞれの学校の特色や強みを生かし、切磋琢磨しながら学園全体の教育力を高めることができるような取り組みを、今後も進めていくことができると考えています。

卒業生企画
特別講演

ステージ企画ゾーンの卒業生企画にて、立命館高等学校、立命館大学をご卒業された高橋智隆氏をお招きしました。講演のほか、Rits Robot Competition にもご出演頂きました。

ロボットクリエイター 高橋 智隆 氏



「Rits Robot Competition」楽しく見させて頂きました。学年を超えて生まれたそれぞれのアイデアが結晶し

た素晴らしいロボット達でした。日本は大量生産の時代を卒業し、新技術・新概念・デザイン・ブランディングなどを通じて新しい価値を生み出して行かなくてはならない時代になりました。そこでは遊び心から生まれる創造性が大事になります。このようなロボットを題材にした教育は、そんな次世代の人材に必要とされる能力

を育ててくれます。今日お会いした子供達が立命館でのユニークな授業を受け、そしていつか何かのプロジェクトと一緒にロボット開発が出来たら、最高ですね。



入試相談ゾーン



大学紹介ゾーン



ポスターセッション・研究発表ゾーン

立命館の初等中等教育を担う4つの中学校・高等学校、1つの小学校があります。

それぞれに特色ある教育方針を打ち出し、優れた教育実践を展開している今日、さらにその教育力向上と教科活動の高度化・活性化・力量アップのために、各附属校の理解を得ながらさまざまな研修事業を実施してきました。2010年度の主な研修事業を振り返ります。

新任APU研修

2010年4月29日(木)29名が参加し研修を行った。新任教員の方に立命館が有する国際大学であるAPUを知っていただき、立命館に対する理解を深めてもらうことを目的に実施している。今回は、山本晋入学部長から「日本の国際化に伴う課題について」をテーマに講演いただき、もう一つ、国際学生へのインタビューを行うこととした。これは、国際学生がAPUを選んだ動機と、どのように学び、将来をどう考えているのかなどインタビューすることにより、その学ぶ姿を知り、今後の教育活動に活かしてもらうことを念頭において実施した。

APUでは、国際学生は卒業までに日本語で24単位を、日本人学生は英語で20単位を取得するこ

とが必要とされている。国際学生の一人、モハメッド・イシティーさん(男子学生、バングラディッシュから来日2年目)は入学時、日本語はまったく話せなかった。現在は日本語中級を受講している。かなり流暢に話することができるので、インタビューしたわれわれが驚かされた。APUへは親戚が以前に在学しておりその関係で入学したとのこと。現在は別府の町で下宿、アルバイトは2つをこなし、月収4万円程度。会計学などを学んでいる。将来は、日本で就職するか、バングラディッシュに帰国して日本企業で働くことを考えている。目標が明確であり、それに向かって努力している姿が印象的であった。国際学生の共通点として、学びへのモチベーションが高

いこと。また、学生によっては3ヶ国語、4ヶ国語を話し、高い能力を有している学生がいること。この他にも、アメリカの大学へ行けば5万ドルが必要とされるが、APUは奨学金もあり、比較的就学しやすい、などの声を聞くことができた。

参加した新任教員からは、私たち教員がこのAPU研修で国際学生のことを理解することができるとも良かった。この体験を各校に戻って生徒たちに還元していかなければならないと感じた、という内容の感想をもらうことができた。



第1回 スクールリーダー研修



2010年5月29日(土) 執行部はじめ各校の主任・部長などスクールリーダー42名が朱雀キャンパスに集まった。講師には、大阪教育大学理事の成山治彦先生をお招きし、様々な対応を迫られる教育現場において、学校リスクマネジメント「保護者対応を考える」をテーマに研修をおこなった。まず保護者クレームの実態を知るということで、大阪教育大学作成のDVD「小学校けんか編」「マスコミ対応編」を鑑賞、それぞ

れの対応について問題点を明らかにした後、その対応の具体的なポイントを指摘いただいた。クレームとして持ち込む保護者と学校との共通点としてまず認識することは、お互い良い学校にしたいということ。始めからクレームと思いついて対応すると、売り言葉に買い言葉のようになり、話がエスカレートすることがある。初期対応の段階で適切に対応すれば、こじれることが少なくなると講演された。

次に行ったワークショップでは、クレームを言う保護者役、それに対応する学校責任者役、批評役を分担してローテーションし、それぞれの役割を体験する

こととした。成山先生からは、中には無理難題という類のものもありますが、ご自分のお子さんのことと思って真剣にとの声かけがあり、気持ちの入ったワークショップとなった。

参加した先生方からは、このワークショップを各校に持ち帰って実施することが重要である。との感想をいただいた。各校で実施されれば、この研修の意味も大きくなる。



授業力を高める技の習得ワークショップ

2010年6月19日(土)講師にパーマー賞を受賞されている筑波大学附属中学校の久保野りえ先生をお招きし、立命館守山中学校高等学校にて、英語教育「小中接続・中高接続」をテーマに23人が参加しての研修を実施した。狙いは授業力アップ。

公立小学校では英語専科の先生はいないが、筑波では置いている。小学校5・6年では週1回、35時間の授業がある。筑波では音声を大事にして、聞く・話す・読む・書くことがベースに根付いている。高校3年の出口から逆算してグランドデザインを描くことが重要。中学の教科書には文法が全部と言って良いほど詰まっている。こなすだけの英語になら

ないように気をつける必要がある。

小学校では、担任が英語を教えるので担任の力量に左右されてしまうことがあるのではないかと。中学から高校については、中学生が何を知っていて何を知らないのかを高校の教師は知るべき。教科書本文だけでは洩れてしまうところがあるのに、それに気づかず、中学校は何を教えているんだ、となりやすい、と伝えられた。生徒も教師も「単語を知らないせい」にしてしまいがちで、何をどうするのかを具体的に指示してあげる必要がある。本文を理解しやすくするために、絵や写真などを教材として準備して、生徒たちが具体的にイメージできるよう、授業

を進めることを重視すること。

発声の授業では発音が少々うまくいなくても単に暗誦するのではなく、会話になるように顔を上げて発声することを練習する。参加教員にワークショップ形式で練習しながら講義を進められた。参加した先生方からは、明日からすぐに実践できる内容であり、役立てたいとの感想が多かった。

